

な か た か ね な な や ま
市原市中高根南名山遺跡(第2次)

1 9 9 8

医療法人 社 団 高 原 会
財団法人 市原市文化財センター

序 文

千葉県ほぼ中央に位置する市原市は、市内を南北に貫流し東京湾に注ぐ養老川を擁し、気候温暖で自然環境に恵まれた地にあり、市内には旧石器時代からの貴重な遺跡が数多く所在しております。

今回、ここに報告する中高根南名山遺跡（第2次）は、医療法人社団高原会による老人保健施設建設に伴い発掘調査を実施したもので調査の結果、特に注目されるものとしては旧石器時代の石器遺物が面的な広がりをもっていたことや、縄文時代早期の竪穴住居跡等が検出されるなど、先史時代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

本報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護と理解のための資料として広く市民の皆様に活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査並びに本書の刊行に際し御指導、御協力をいただきました医療法人 社団高原会、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会ふるさと文化課をはじめ、関係諸機関に対し心から感謝の意を表します。

平成10年10月30日

財団法人 市原市文化財センター

理事長 小 茶 文 夫

例 言

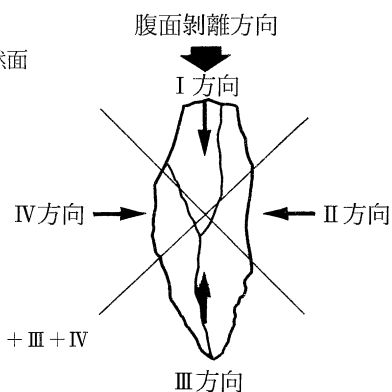
- 本書は医療法人 社団高原会による老人保健施設建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 本書は下記の遺跡を収録したものである。
中高根南名山遺跡（第2次） 千葉県市原市中高根字南名山1,341-1（12219-セ257）
- 発掘調査から報告書作成に至る業務は医療法人 社団高原会の委託を受け、財団法人 市原市文化財センターが実施した。
- 発掘調査及び整理作業の担当者は以下のとおりである。
確認調査 平成9年9月16日～平成9年10月20日
対象面積 13,000㎡
上層遺構確認調査面積 1,300㎡（対象面積の10%）
旧石器時代確認調査面積 130㎡（対象面積の1%）
担当者 小川浩一
本調査 平成9年11月10日～平成9年11月26日
上層本調査 112㎡ 下層本調査 100㎡
担当者 田中清美
整理作業 平成10年4月1日～平成10年5月15日
担当者 蜂屋孝之 小川浩一
- 本書の執筆、編集は、第2章1を蜂屋 孝之が、それ以外を小川 浩一が担当した。
- 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、市原市教育委員会 生涯学習部ふるさと文化課、安井健一氏ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 本書で使用了地形図、及び航空写真は下記のとおりである。
国土地理院発行 1/25,000地形図「姉崎」(NI-54-19-16-3)
国土地理院発行 1/25,000地形図「上総横田」(NI-54-19-16-4)
国土地理院発行 約1/10,000航空写真（昭和36年撮影）(C20-(B)-9)

《石器属性表の見方》

- ①打面種類 H……平坦剥離面、多……多剥離面、L……線状、P……点状、C……自然面
数字は剥離面の数を示す
- ②打面調整・頭部調整 ○……行う頻度が高い、×……行わない
- ③背面構成とその類型は第14図参照
- ④折面部位 H……打面図、M……中間部、B……末端部、R……右側、L……左側

【背面構成の種類】

- a類：一方向 I d類：三方向 I + II + III、I + II + IV、I + III + IV
b類：二方向 I + III、III II + III、II + IV、III + IV
c類：二方向 I + II、I + IV、II、IV e類：四方向 I + II + III + IV、II + III + IV



背面構成の種類

本文目次

序 文	
例 言	
第1章 調査の概要	1
1. 調査の経緯と経過	1
2. 調査の方法	1
3. 地理的環境	2
4. 歴史的環境	2
5. 基本層序	6
第2章 遺構と遺物	8
1 旧石器時代	8
2 縄文時代	12
3 平安時代、その他	16
第3章 まとめ	18
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 グリッド設定図	1	第10図 001号遺構出土遺物	13
第2図 周辺の主な遺跡	3	第11図 002号遺構及び出土遺物	14
第3図 中高根南名山遺跡(第2次)調査地点 と周辺地形図	4	第12図 003号遺構	15
第4図 基本土層図	6	第13図 遺構外出土縄文時代土器	15
第5図 遺構及びグリッド配置図	7	第14図 遺構外出土縄文時代石器	16
第6図 第1ブロック器種別分布図	9	第15図 004号遺構及び出土遺物	17
第7図 第1ブロック出土遺物	10	第16図 005号遺構	18
第8図 単独出土石器	11	第17図 中高根南名山遺跡第1次調査地点(第1 ～6地点)及び第2次調査地点	19
第9図 001号遺構平面図及び断面図	12		

表 目 次

第1表 第1ブロック出土石器属性表	8	第3表 単独出土石器属性表	11
第2表 第1ブロック組成表	11		

図 版 目 次

図版1 航空写真	図版4 第1ブロック出土遺物・単独出土石器
図版2 確認調査状況・第1ブロック調査状況	図版5 縄文時代以降出土遺物・縄文時代石器
図版3 001号・002号・003号・004号・ 005号遺構及び遺物出土状況	

第1章 調査の概要

1. 調査の経緯と経過

医療法人 社団高原会は、千葉県市原市中高根字南名山1,341-1・-2に、老人保健施設の建設を計画した。建設に先立ち、当施設用地は国庫補助事業として平成9年9月16日から平成9年10月20日にかけて確認調査が行われた。そして、確認調査の結果を鑑み、埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関と協議した結果、事業計画の変更は困難であり建物の建設予定部分にかかる遺構については本調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。発掘調査は財団法人 市原市文化財センターが実施することとなり、医療法人 社団高原会との間に平成9年11月4日に発掘調査委託契約が締結された。本調査は、平成9年11月10日から平成9年11月26日にわたって実施し、整理作業は平成10年4月1日から平成10年5月15日の期間にわたり行った。

2. 調査の方法

調査区の設定 調査対象範囲全域に20m×20mの方眼網を設定し、大グリッドとした。その大グリッドを更に4つに分割しa、b、c、dの呼称をつけた。そして、確認調査におけるグリッド設定では大小グリッドを組み合わせて例えばA1-aグリッドのような呼称とした(第1図)。

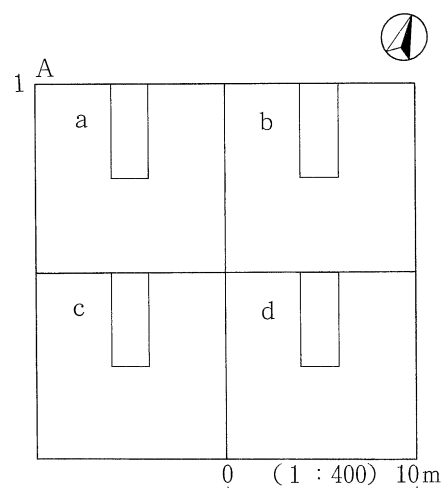
上層確認調査 縄文時代以降の上層の確認調査は、調査区全域に2m×5mのグリッドを全対象面積の10%設定し、遺構・遺物の分布を確認し、本調査に移行している。

下層確認調査 旧石器時代(ローム層)の確認調査については、調査区全域に2m×2mのグリッドを全対象面積の1%設定し、クラムシェル(重機)を使用して武蔵野ローム層第I層上面に達する約2mの深さまで、20cmごとに掘り下げて旧石器時代の遺物の有無を確認した。なお、上層精査中にソフトローム内より黒曜石の集中地点が確認されたB2-bグリッドについては、手掘りによって平面的な遺物の分布範囲を確認した。

本調査 縄文時代以降の遺構・遺物の本調査では、竪穴住居跡については4分割し土層観察用のベルトを設定して調査を行った。遺物の取り上げは、必要に応じて個別に番号を付し地点とレベルを記録した。また、炉穴等についても基本的には同様の調査方法である。遺構外出土の遺物については、基本的に小グリッド一括で採取している。

下層本調査 確認調査の結果に基づきB2-bグリッドを主体とする遺物の集中地点について、周囲を拡張して本調査を行い出土した遺物について地点とレベルを記録し、剥片集中地点の出土層位ならびに、平面的な分布状況を把握した。なお確認調査で遺物が検出されたグリッドがあったが、保存協定等により施設の建設部分にかぎり本調査を実施した。

遺構番号 遺構の内容・性格にかかわらず、3桁の通し番号を付した。よって、番号は001号遺構から始まる。



第1図 グリッド設定図

3. 地理的環境

千葉県市原市は房総半島のほぼ中央に位置し、北は千葉市、北東は茂原市、南は袖ヶ浦市に隣接している。北側には村田川が流れ、支流によって市の北部は樹枝状に開析されている。西側は約10kmで東京湾に達する。中高根南名山遺跡の東方2.5kmには養老川が流れ、周囲の沖積地である低地には広大な水田地帯が形成されている。

中高根南名山遺跡（第2次）は、養老川中流域を東に臨む台地上に位置し、標高は約80m前後を測る。本遺跡周辺は、姉崎・市原・南総の3段丘面と呼ばれる養老川流域の段丘面のうち最も標高が高い姉崎段丘面に位置し、そのため標高が80m前後と養老川左岸を臨む台地では、最も高い位置にある。台地は東西長0.6km、南北長1.5kmを測り約900,000㎡を占地し、平坦面を形成している。遺跡の東側は養老川の支流三枝川によって開析され、谷は細かく台地を浸食しており当台地の東側は舌状に張り出す形状を呈している。そして、この台地斜面は急勾配をなしている。開析谷（低地）との比高差は約25mである。西側は、北西約500mに小櫃川水系の支流松川による開析谷が入り込んでいる。この台地斜面は、東側の斜面の勾配に比して緩やかとなっている。低地との比高差は約13mである。つまり、本遺跡は、遺跡の東側を南北に走る養老川支流三枝川と、西側を南西から本遺跡が存在する北東方向に向かって迫る小櫃川水系の支流松川との分水嶺にあたる台地上に位置する。

今回、調査の対象となった部分は、東側が養老川の支流三枝川によって開析され、谷が南北に深く入り込んだ本台地上中央部分の東側縁辺部にあたる。

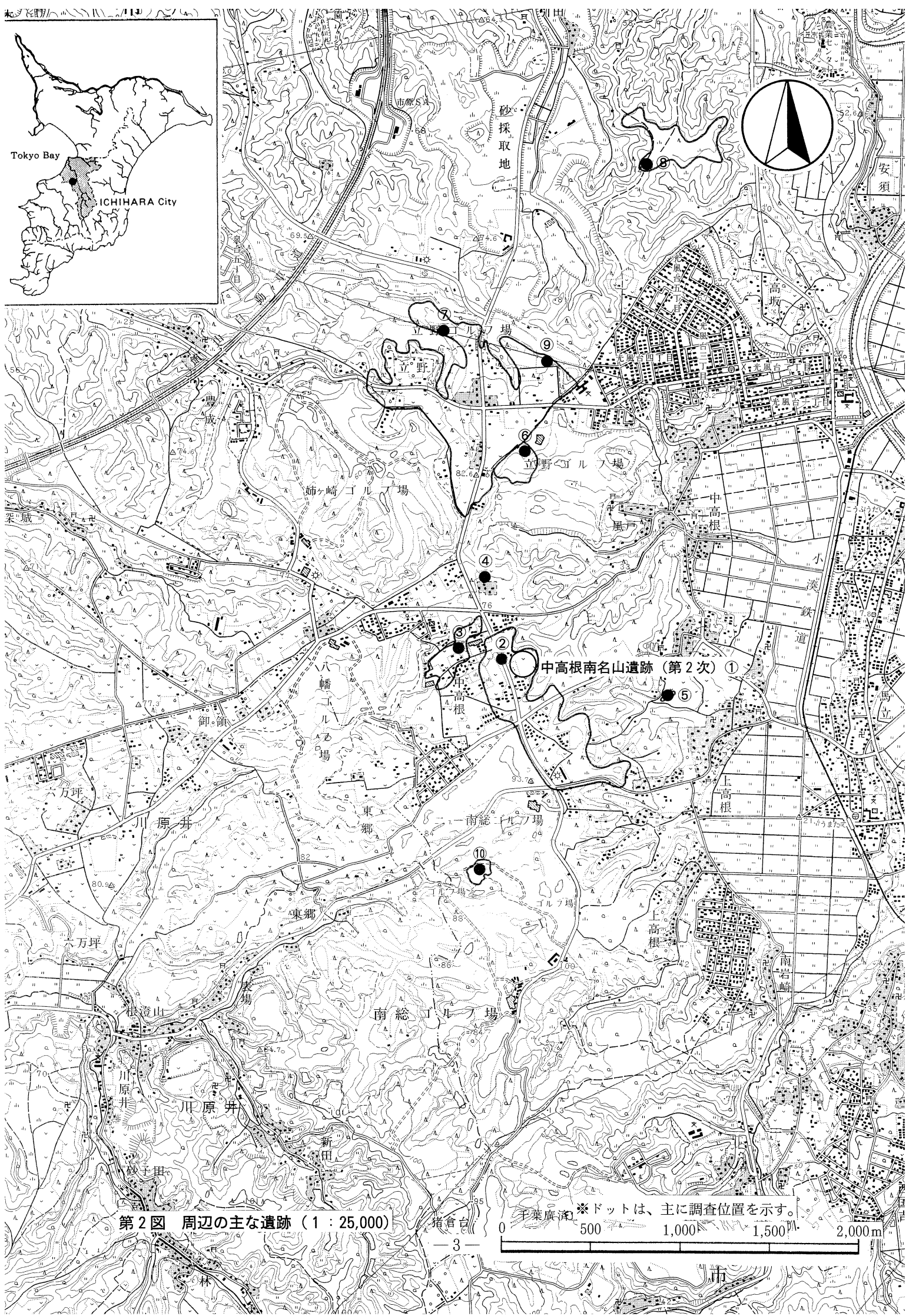
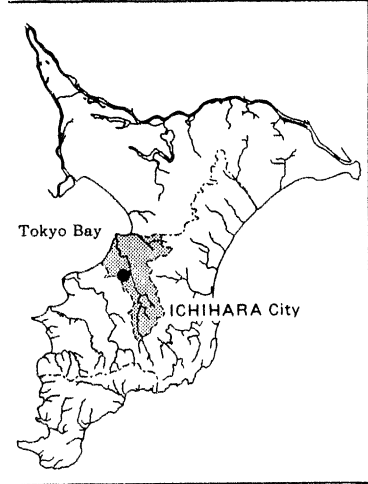
4. 歴史的環境

中高根南名山遺跡（第2次）①は、市原市のほぼ中央に位置し、その付近一帯は南総地域と呼ばれている。周辺は、姉崎・市原・南総の3段丘面と呼ばれる養老川流域の段丘面に多くの遺跡が存在する。しかし、発掘調査は国分寺台周辺等に比してあまり多くなく、調査規模も大規模なものはあまり行われていない。ここでは、調査歴のある遺跡を中心に、周辺の歴史的環境についてふれてみたい。

まず、隣接する西側において（財）市原市文化財センターによって、昭和62年度から平成4年度にかけて中高根南名山遺跡（第1次）②（第1地点～第6地点）として調査が行われており、平成7年度に調査報告書が刊行されている。縄文時代土坑・陥し穴、奈良・平安時代方形周溝状遺構・溝・道路状遺構、及び旧石器時代剥片出土地点等を検出している。

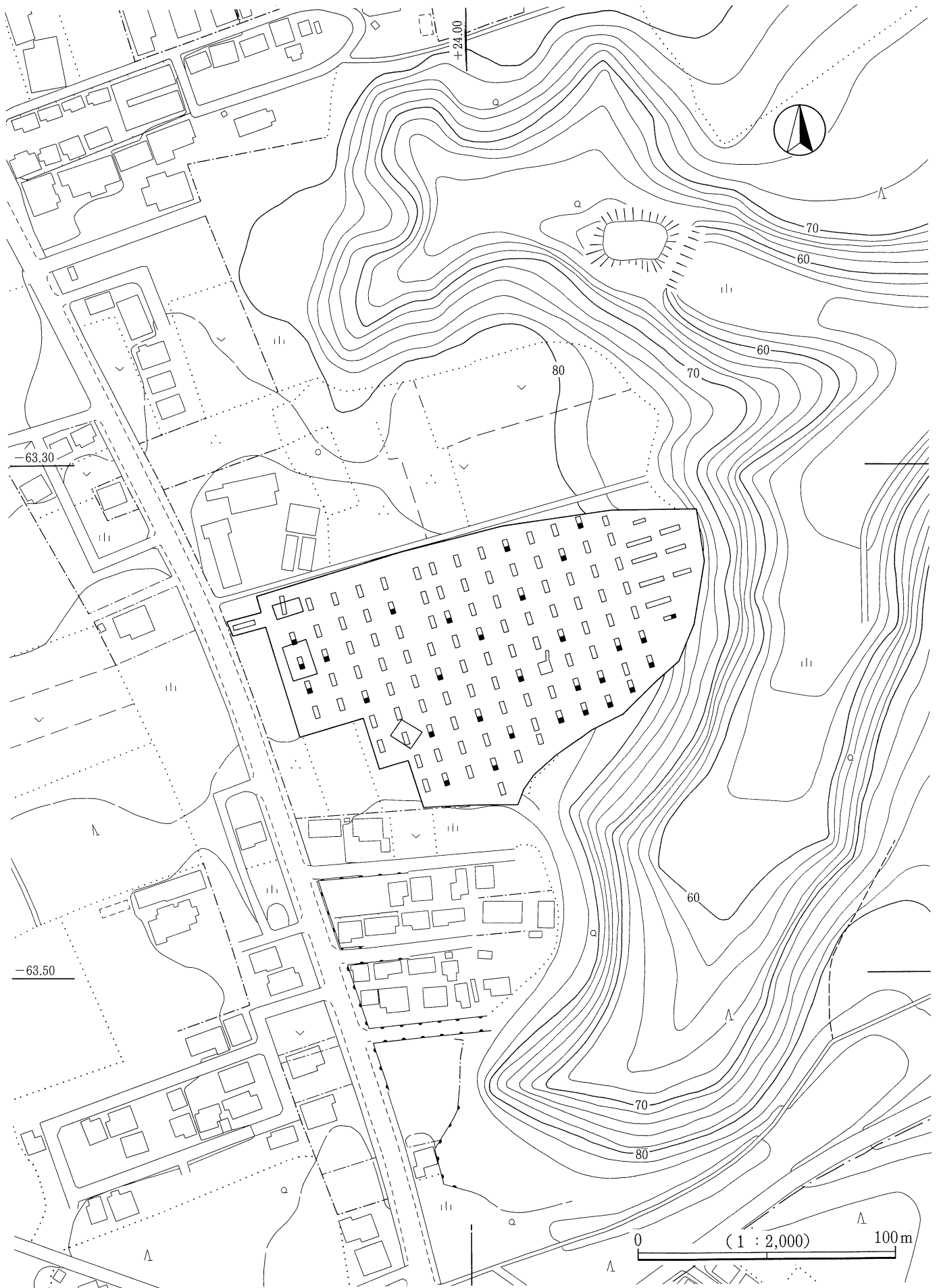
旧石器時代の調査は当地域周辺においてあまり例がないが、その中で南東約6.6kmに南総中学遺跡が存在し、ローム層上位面からナイフ形石器、彫器、両面及び片面加工尖頭器などを検出している。また東約3kmには土宇遺跡が存在し、グリッドからの出土であるが搔器、削器等を検出した。また、先述した中高根南名山遺跡（第1次）②の第2地点においても、第2黒色帯下層から2点の自然礫と一点の剥片とが確認されている。現表土からの深さは、約1.8mである。

縄文時代の遺跡としては、南原遺跡③を上げることができる。本遺跡の北西約300mに位置し、本台地の北端にあたる。この遺跡からは有舌尖頭器が採集され、縄文時代草創期に位置付けられる土器群が散布していたことから、東京大学の諸氏によって昭和53年度と昭和54年度の2次にわたって発掘調査が行われ、多数の有舌尖頭器を含む石器群や隆起線文土器を主体とした土器群が発見されている。また、南東約4.7kmには奉免上原台遺跡が存在する。縄文時代早期条痕文系土器及び沈線文系土器の



第2図 周辺の主な遺跡 (1 : 25,000)

※ドットは、主に調査位置を示す。
 0 500 1,000 1,500 2,000m



第3図 中高根南名山遺跡（第2次）調査地点と周辺地形図

炉穴群や、縄文時代前期（関山式期）の竪穴住居跡等が検出されている。他の縄文時代の遺跡としては、早期～前期において北東約5.4kmに北旭台遺跡が存在する。条痕文系土器をはじめとした竪穴住居跡14軒などを検出した。また、北側約1.1kmには外迎山遺跡⑥があり、早期に比定される竪穴住居跡1軒や炉穴3基が検出されている。そして、先述した南総中学遺跡からは、関山Ⅱ式頃とみられる住居跡5軒などが調査されている。なお、確認調査において北側約2kmに位置する唐沢遺跡⑦より早期条痕文系の土器群を検出し、さらに北側約3kmに位置する荻原野遺跡⑧A区などからも早期の包含層等が調査されている。また、北側約400mに堀込貝塚④や南東側約800mに上高根貝塚⑤等の存在が知られている。上高根貝塚は、養老川流域最奥部に位置する大規模な点列貝塚として知られており、昭和36年に武田宗久・金子浩昌氏を中心とした南総郷土史研究会により発掘調査が行われ、堀ノ内式期を主とする遺物類を検出した。中期～後期が主体と考えられている。

奈良・平安時代の遺跡としては、先述した外迎山遺跡⑥において方形周溝状遺構28基、火葬墓4基を検出し、また、同じく先述した北旭台遺跡では方形周溝状遺構2基を検出した。他には、同様に奉免上原台遺跡においても方形周溝状遺構や火葬墓が検出されている。そして、北側約1.7kmに存在する山見塚遺跡⑨は、確認調査であるが方形周溝状遺構11基が確認されている。北東約5kmに位置する磯ヶ谷門脇遺跡では、8世紀第1四半期頃と考えられる「(海)里長」と読める墨書土器を出土している。また、廃寺跡では北東約3kmに二日市場廃寺跡が存在し、一部について確認調査がおこなわれている。掘立柱建物跡などの遺構や雷文縁複弁八葉蓮華文鏡瓦、重弧文と唐草文の宇瓦等が出土しており、瓦を使用した建物跡（寺院跡）は、7世紀末～9世紀代と考えられている。また、南側約1kmには集落及び廃寺跡等を検出した萩ノ原遺跡⑩があり、本台地の南端に位置する。遺構としては、基壇や掘立柱建物跡を検出したほか、遺物では、瓦塔片や布目瓦及び墨書土器等が出土している。時期は、奈良時代末から平安時代初めと考えられている。

また、古代～中世における遺跡としては、本遺跡の北に先述した外迎山遺跡⑥・唐沢遺跡⑦・山見塚遺跡⑨といった立野遺跡群や字鎌倉街道等が存在しており、周辺は駅路や鎌倉街道の推定地となっている。

（参考文献）

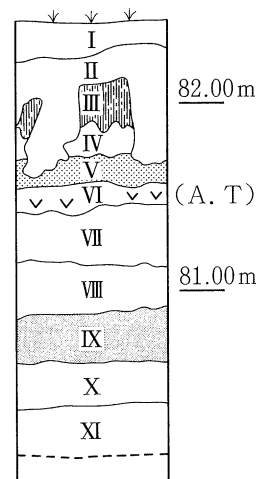
- 米田耕之助 「第1章 調査遺跡の位置と考古学的環境」『昭和62年度 市原市埋蔵文化財緊急調査報告書』 市原市教育委員会 1987
- 田所 真 「15. 中高根・南名山遺跡」『昭和62年度 市原市文化財センター年報』（財）市原市文化財センター 1987
半田 堅三 『中高根南名山遺跡』（財）市原市文化財センター 1995
- 小川 浩一 「第5章 中高根南名山遺跡」『平成9年度 市原市内遺跡発掘調査報告』 市原市教育委員会 1998
- 大塚 達朗 「市原市南原遺跡第1次調査抄報」『伊知波良1』 伊知波良刊行会 1979
- 大塚 達朗 「市原市南原遺跡第2次調査抄報」『伊知波良4』 伊知波良刊行会 1980
- 武田宗久・金子浩昌 「千葉県市原郡上高根貝塚」『日本考古学年報14』 誠文堂新光社 1966
- 寺門 義範他 『千葉県萩ノ原遺跡』 日本文化財研究所 1975
- 田中清美・忍澤成規 『奉免上原台遺跡』（財）市原市文化財センター 1992
- 倉田芳朗・相京建史 『千葉・南総中学遺跡』 市原市教育委員会 1978
- 三ツ木貞夫 「第1節 先土器時代、南総中学出土の石器」『千葉・南総中学遺跡』 市原市教育委員会 1978
- 木對 和紀 『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』（財）市原市文化財センター 1987
- 郷堀 英司他 『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告』 千葉県教育委員会 1984

5. 基本層序

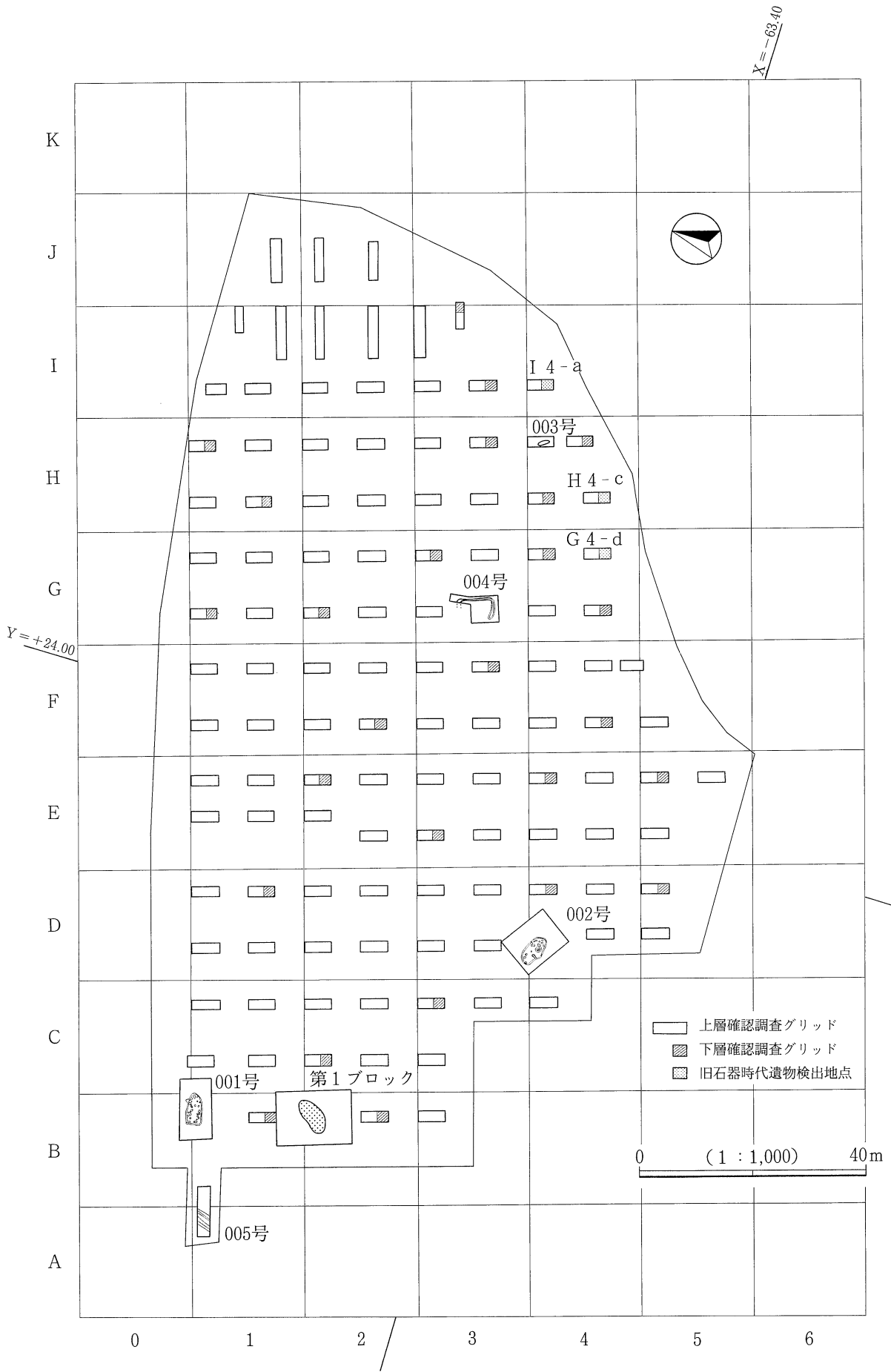
中高根南名山遺跡（第2次）が立地する台地は、先述した姉崎段丘面に位置するがその地理的立地状況から見て比較的安定した洪積台地ということができ、市原市中部地域の一般的な堆積土層を表現していると考えられる。ここでは、遺跡のほぼ中央に位置するE2-bグリッドの基本層序を取り上げ説明を行うことにする。

基本層序は第4図のようであった。立川ローム層の層厚は千葉市域の層厚とほぼ同じであるといえる。各層の状況は以下のとおりである。

- I層 黒褐色土。表土及び耕作土である。台地上での厚さにはばらつきがある。特に台地東部の緩傾斜地では表土が厚かった。
- II層 暗褐色土。表土層と漸移しており、確認できない場所が多い。
- III層 黄褐色軟質ローム。所謂ソフトローム層と言われる立川ローム最上層である。
- IV層 明褐色硬質ローム。特徴的な赤色スコリア粒を含む。
- V層 褐色硬質ローム。第1黒色帯に相当する。1～5mm大の赤色スコリアが微量だが均等に散る。層厚はIV層とともに厚い。
- VI層 明黄褐色硬質ローム。A Tを含む層である。0.5～1.0mm大のガラス質が少量だが均等に散る。
- VII層 褐色硬質ローム。第2黒色帯の上部に相当する。赤色・黒色スコリア粒がやや多く含まれる。
- VIII層 暗褐色硬質ローム。第2黒色帯における下部の上半である。1～5mm大の赤色スコリアが均等に散る。若干黒色味を呈するが、IX層に比べれば色はうすかった。
- IX層 暗褐色硬質ローム。第2黒色帯における下部の下半である。1mm大の赤色スコリアが微量含まれる。黒色味を伴うが、濃い黒色を呈してはいない。
- X層 茶褐色ローム。やや軟質。スコリアは少なくなるが、1mm大の赤色スコリアが微量だが均等に散る。
- XI層 茶褐色ローム。やや軟質。スコリアほとんど見えなくなる。立川ローム最下層。



第4図 基本土層図



第5図 遺構及びグリッド配置図

第2章 遺構と遺物

1. 旧石器時代

第1ブロック (第6・7図)

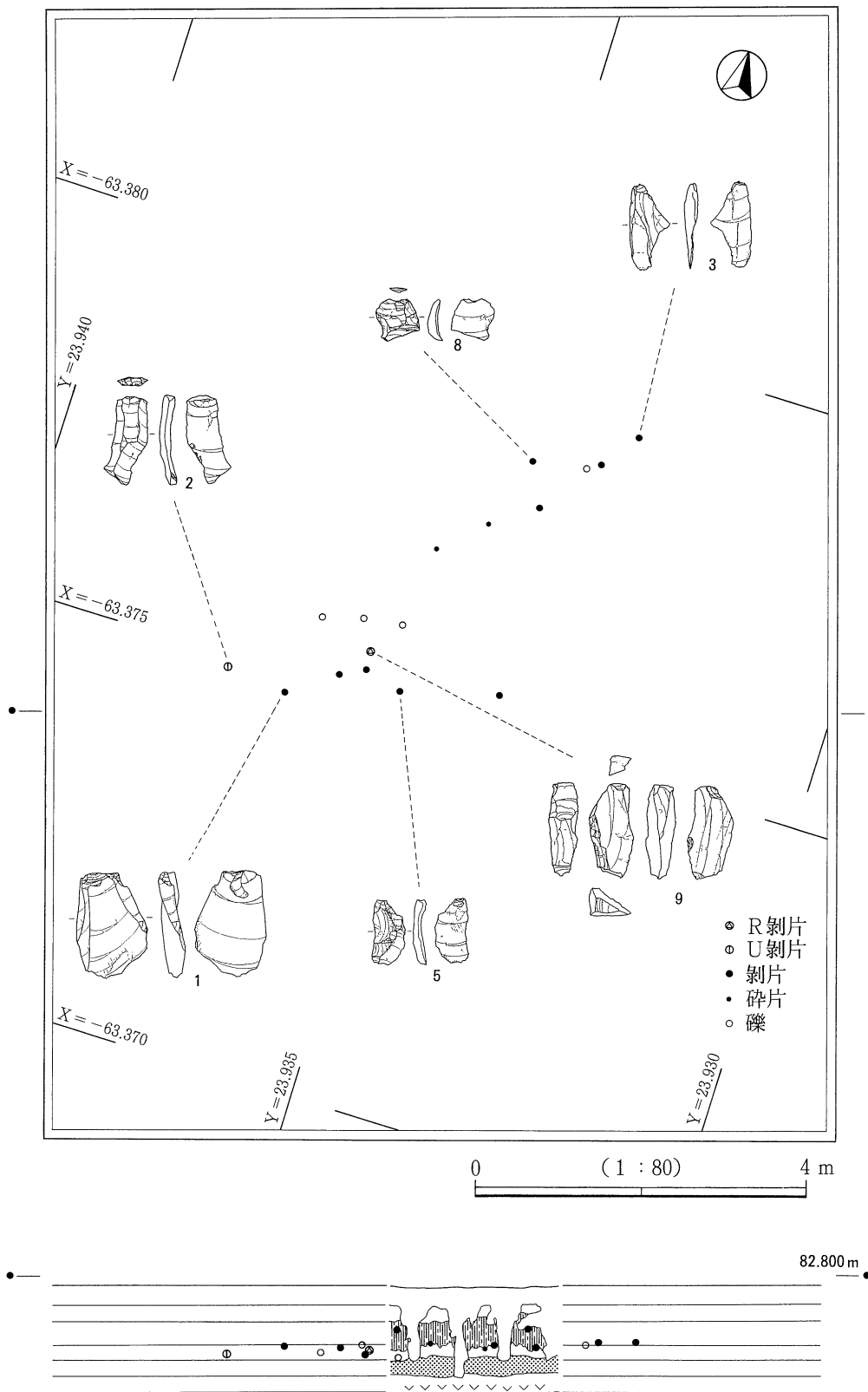
分布状況 確認調査においてB2-bグリッドで遺物が検出されたブロックである。調査区の西端に位置し、谷から最も離れた平坦面に当たる。耕作機械によって場所によってはVI層上面までトレンチ状の攪乱が30cm間隔で入っていた。このため、ブロック中の遺物がこの攪乱の中から出土し、原位置をとどめていないものがある。本遺跡において縄文時代以降の石器等は極めて希薄であることから、本ブロック付近の攪乱中から検出された遺物は、ブロック中の遺物と見なしてもほぼ間違いのないものと判断される。

遺物総数は29点である。分布範囲は北東方向に延びる楕円形を呈し、北東方向に6.0m、北西方向に3.0mを測る。垂直分布では0.4m程度の高低差がある。Ⅲ層下部からⅣ層にかけての分布である。礫は7点出土しているが、攪乱層中からのものが3点含まれる。1点だが焼けた礫が検出されている。礫は凝灰岩1の円礫が破砕したものが3点あるほかは別母岩の礫である。

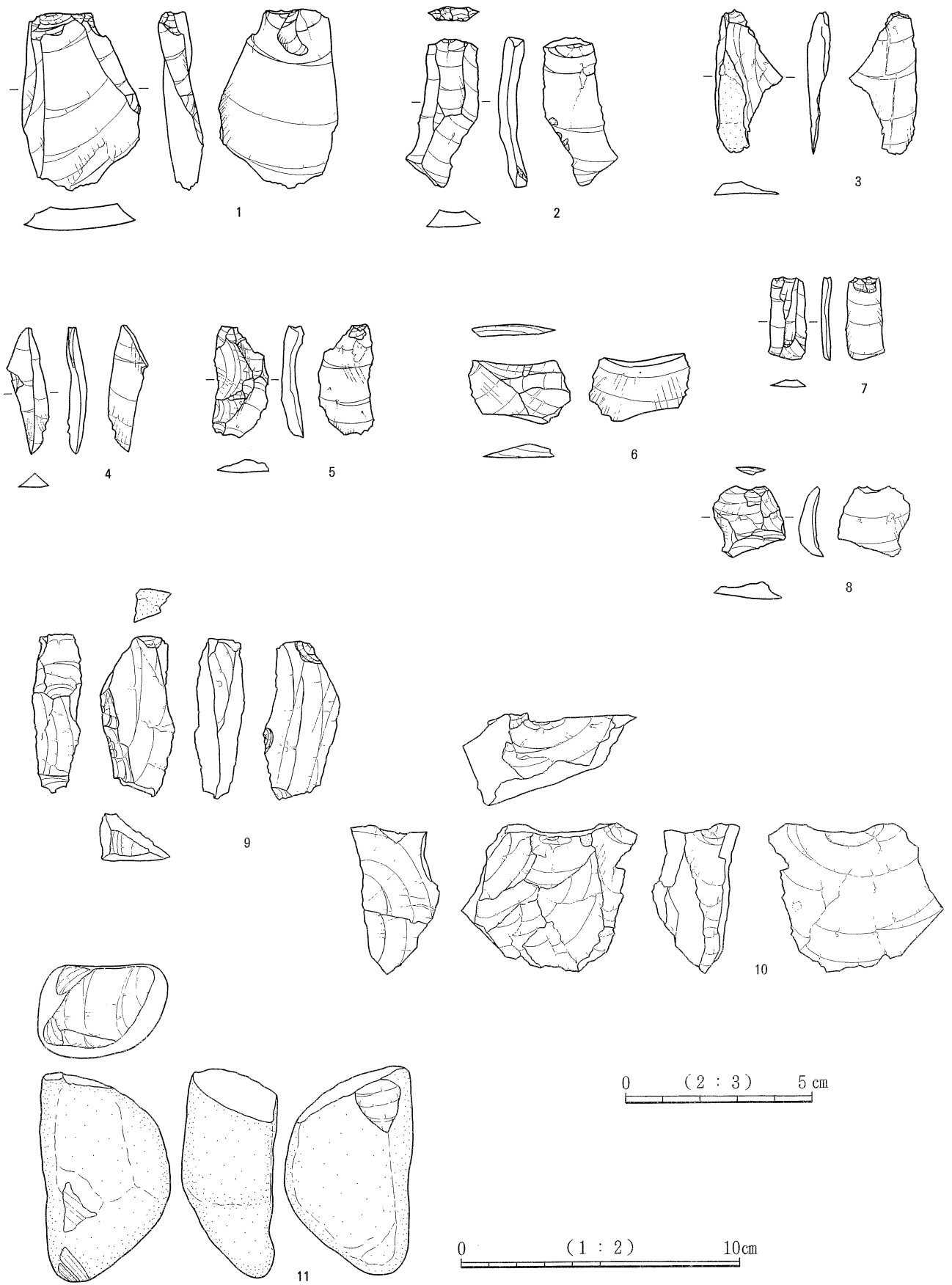
出土遺物 器種組成は石核1点、R剥片1点、U剥片1点、剥片16点、碎片3点、礫7点である。

第1表 第1ブロック出土石器属性表

No.	挿図番号	遺物番号	器種	長さ×幅×厚さ(mm)	重量g	打面種類	打面調整	頭部調整	背面構成	背面類型	打角(°)	折面部位	母岩番号	備考
1	5	B2-b,1	剥片	28.1×14.4× 5.2	1.43	—	—	—	I、Ⅲ、Ⅳ	d			黒曜石1	
2	8	B2-b,2	剥片	18.2×20.0× 5.3	1.09	—	—	—	I、Ⅱ、Ⅲ	d			黒曜石1	
3		B2-b,3	剥片	27.3×16.3× 5.7	2.16	—	—	—	Ⅱ、Ⅳ	d		H,B	黒曜石2	
4		B2-b,6	碎片	9.9× 7.0× 1.9	0.10	—	—	—				H	黒曜石1	
5		B2-b,7	剥片	12.6×17.7× 4.4	0.90	平	×	○	I、Ⅱ	c		B	珩質頁岩1	
6		B2-b,9	剥片	7.3× 5.6× 0.8	0.03	—	—	—					珩質凝灰岩1	
7		B2-b,10	剥片	3.8× 8.9× 4.6	0.25	—	—	—	I、Ⅱ	c			チャート1	
8		B2-b,12	礫	40.6×43.1×14.5	26.93								凝灰岩1	
9	2	B2-b,プレ1	使用痕のある剥片	39.3×19.2× 6.8	3.10	多	○	○	I、Ⅱ	c	115		チャート1	
10	1	B2-b,プレ2	剥片	47.1×31.9× 7.9	9.4	平	×	○	I	a	93		珩質凝灰岩2	
11		B2-b,プレ3	剥片	13.5×17.8×11.8	3.00	C	—	—	I、Ⅳ	c			安山岩1	
12	6	B2-b,プレ4	剥片	20.0×19.7×15.8	6.50	平	×	×	I、Ⅱ	c			安山岩1	
13	9	B2-b,プレ5	二次加工のある剥片	12.4×41.6×20.0	10.40	C	×	×	I	a			チャート1	
14		B2-b,プレ6	礫	40.5×30.3×11.3	13.69								凝灰岩1	
15		B2-b,プレ7	礫	50.9×32.0×11.0	17.46								凝灰岩1	
16		B2-b,プレ8	礫	64.7×40.7×25.7	68.59								砂岩1	
17		B2-b,プレ9	剥片	22.8×24.4× 9.7	4.58	—	—	—	I、Ⅳ	c		H	チャート1	
18	3	B2-b,プレ10	剥片	36.3×20.2× 3.4	1.67	—	—	—	I、C	c			珩質頁岩2	
19	4	B2-b,プレ11①	剥片	32.7×10.7× 4.4	0.82	—	—	—	I、Ⅲ	d			チャート1	攪乱層中
20	7	B2-b,プレ11②	剥片	21.7× 9.9× 2.3	0.60	線	×	×	I	a		B	チャート1	攪乱層中
21		B2-b,プレ11③	剥片	23.9× 8.1× 2.8	0.79	—	—	—	I、Ⅱ	c		H,B	チャート1	攪乱層中
22		B2-b,プレ11④	剥片	14.9×12.1× 4.5	0.91	—	—	—	I	a			凝灰岩1	攪乱層中
23		B2-b,プレ11⑤	礫	17.5×15.2× 7.1	2.73								凝灰岩1	攪乱層中
24		B2-b,プレ11⑥	剥片	23.5×26.3× 9.4	5.69	—	—	—	I、C	c		B	珩質凝灰岩2	攪乱層中
25		B2-b,プレ11⑦	焼礫	104.5×58.1×35.6	247.2								砂岩1	攪乱層中
26	11	B2-b,プレ11⑧	礫	77.6×43.1×34.2	171.79								凝灰岩1	攪乱層中
27		B2-b一括	碎片	4.3× 4.0× 1.8	0.04	—	—	—	I、Ⅱ	c			チャート1	攪乱層中
28		B2-b一括	碎片	7.8× 5.8× 0.8	0.03	—	—	—	I	a			凝灰岩2	攪乱層中
29	10	B2-b一括	石核	37.8×40.5×19.3	32.91								安山岩	攪乱層中



第6図 第1ブロック器種別分布図



第7図 第1ブロック出土遺物

第2表 第1ブロック組成表

母岩	器種	石核	R剥片	U剥片	剥片	砕片	礫	合計	数量比%
黒曜石	1				2			3	10.4
黒曜石	2				1			1	3.4
珩質頁岩	1				1			1	3.4
珩質頁岩	2				1			1	3.4
珩質凝灰岩	1				1			1	3.4
珩質凝灰岩	2				2			2	6.9
チャート	1		1	1	5	1		8	27.7
安山岩	1	1			2			3	10.4
凝灰岩	1				1		5	6	20.8
凝灰岩	2					1		1	3.4
砂岩	1						1	1	3.4
砂岩	2						1	1	3.4
合計		1	1	1	16	3	7	29	100.0
組成比%		3.4	3.4	3.4	55.2	10.4	24.2	100.0	

また、母岩別では、12母岩が認められた。黒曜石・珩質頁岩・珩質凝灰岩・チャート・凝灰岩・安山岩等である。

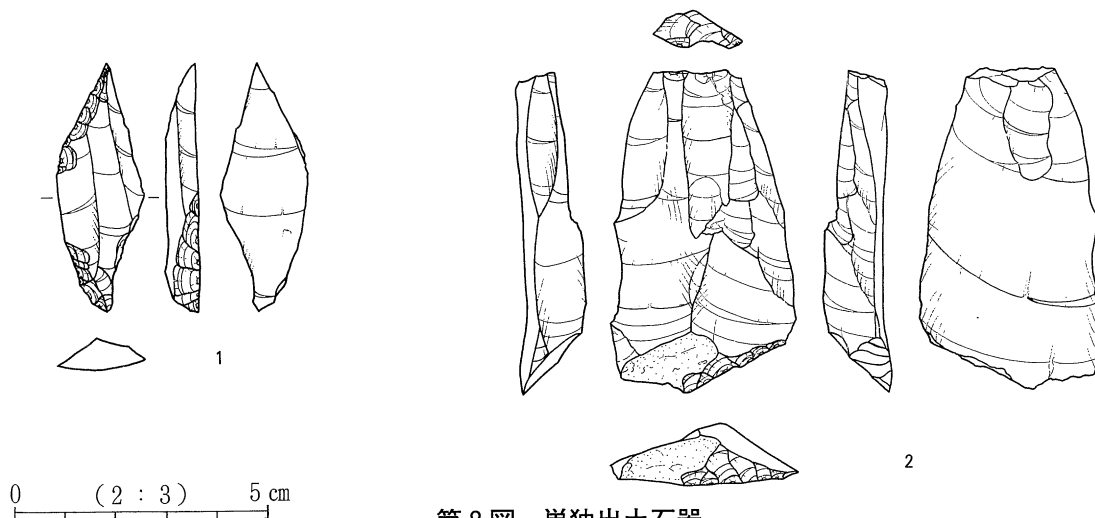
1・4～8は剥片である。6は上下端部の折れ面が見られる。2はU剥片とした。腹面左側縁に微細剥離痕が認められる。9はR剥片とした。背面左側縁に若干の細部加工が施されている。10は石核である。11は攪乱中から出土した礫である。下端部に左上方向の溝状の研磨痕らしき痕跡が4本ほど認められるが、礫の表面が風化しており人為的なものによるかどうか断定しにくい。

単独出土石器 (第8図)

確認調査によって遺物が検出された下層グリッドのうち、建物を建設する部分に当たらない場所であるため、本調査を実施しなかった地点から出土した。本調査を行えば、石器のブロックが検出される可能性が高い。遺物が検出されたのは、H4-cからナイフ形石器1点、I4-aからR剥片、G4-dから剥片1点が出土している。1はナイフ形石器である。縦長剥片を素材とし、打面部を先端側に設定し、除去するように細部加工している。また、打面部に対向する末端を細部加工し、平面形状が平行四辺形状になるように整形を強いている。Ⅲ層下部からⅣ層にかけての層位から出土している。2はR剥片である。縦長の剥片の末端に二次加工を施している。末端部に自然面を残している。Ⅲ層下部からⅣ層にかけての層位から出土している。

第3表 単独出土石器属性表

No.	挿図番号	遺物番号	器種	長さ×幅×厚さ(mm)	重量g	打面種類	打面調整	頭部調整	背面構成	背面類型	打角(°)	折面部位	母岩番号	備考
1	1	H4-c,2	ナイフ形石器	47.5×16.6×6.0	3.70	-	-	-	I	a			珩質頁岩3	Ⅲ～Ⅳ層
2	2	I4-a,5	二次加工のある剥片	62.3×35.6×11.5	23.23	多	○	○	I、C	d	108		珩質頁岩4	Ⅲ～Ⅳ層
		G4-d,1	剥片	19.3×9.8×5.7	23.23	-	-	-	I、II	c		H,B	黒曜石3	Ⅲ～Ⅳ層



第8図 単独出土石器

2. 縄文時代

竪穴住居跡

001号遺構（第9・10図）

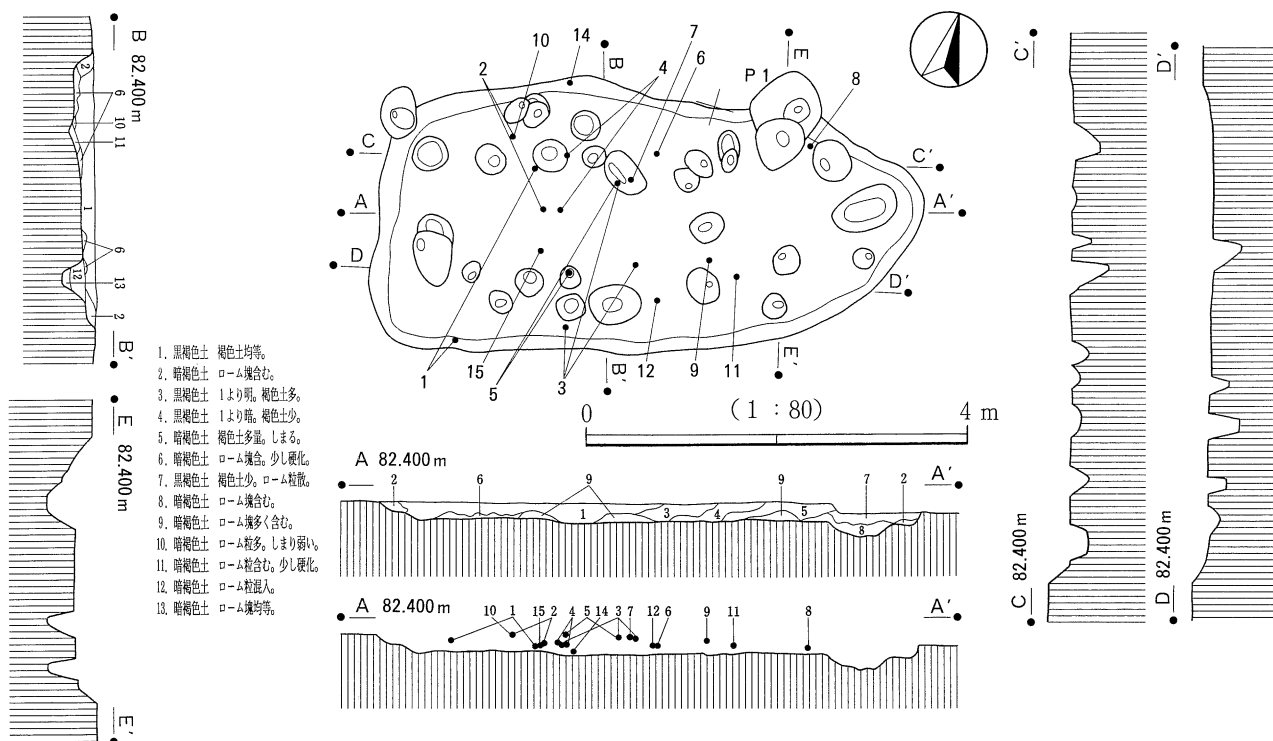
位置 B1-bグリッドを主体に検出された。

形態 東西方向に延びる隅丸の砲弾形を呈した形態を有している。規模は、検出面で長軸長5.75m、短軸長2.85mをそれぞれ測る。検出面からの深さはあまりなく、遺存状態はよくない。

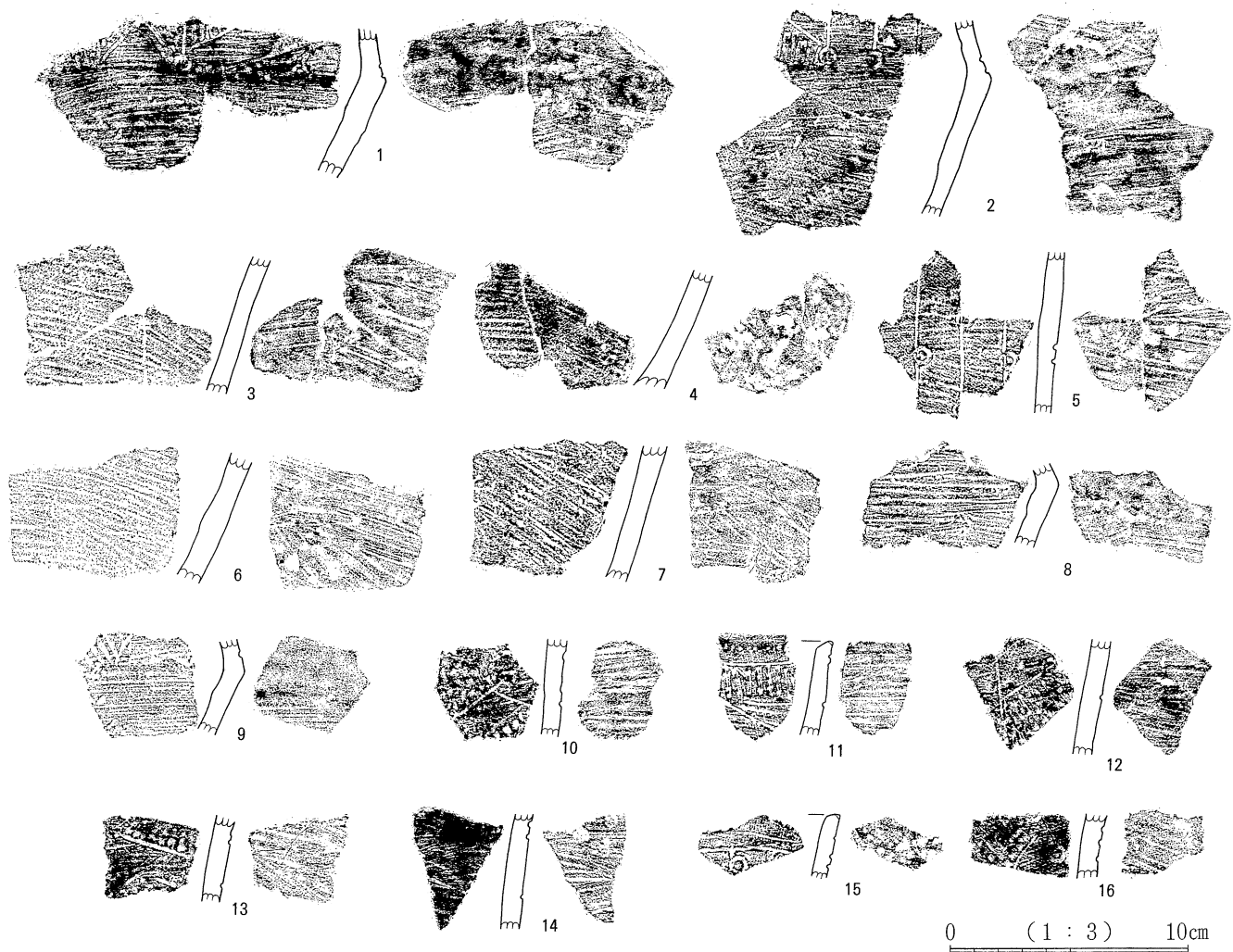
構造 床面は全体的に平坦であるが、ほとんど硬化していない。残存壁高は、東壁で10cm、西壁で17cm、南壁で18cm、北壁で20cmをそれぞれ測る。炉跡や壁溝は検出されなかった。ピットは計26個検出され、床面に不規則に存在する。なお、住居北辺東側のP1は、明らかに遺構に伴わないピットである。それ以外のピットにおける床面からの掘り込みの深さは、深いもので40~43cm、浅いもので10~32cmを測る。平均は23cm程度であるが一定していない。またピット間の距離は約20~60cmとばらつきがある。いわゆる主柱穴と判断されるものはなく、上屋の構造は強固なものではなかった可能性が高い。床面積は12.7㎡である。

遺物出土状況 主に床面及び床面付近から出土しているが、確認面上からも検出されている。

出土遺物 出土した縄文土器は、早期中葉の鶉ヶ島台式土器である。2~3個体分であろうと思われる。文様は、沈線による区画文の中に押引文を充填し、沈線文の交差部に竹管による刺突文を施すものに限定されている。胎土には繊維を混入しているが量的にはあまり多くない。地文となる条痕は、貝殻条痕ではなく茎束条痕と思われる。以上のことから、判断すると出土した土器の時期は鶉ヶ島台式の中葉と考えられる。



第9図 001号遺構平面図及び断面図



第10図 001号遺構出土遺物

002号遺構 (第11図)

位置 D4-aグリッドを主体に検出された。

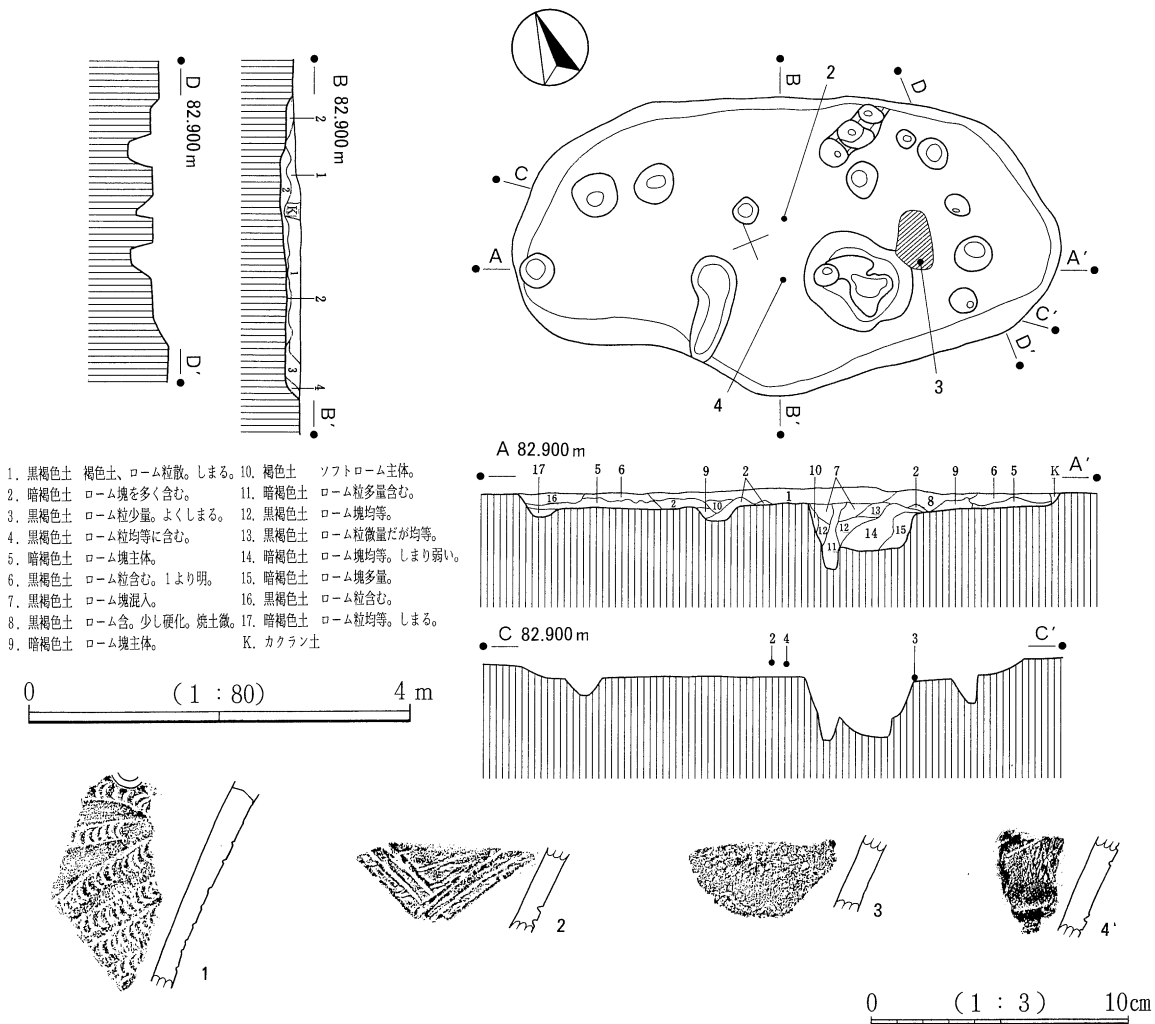
形態 南東—北西方向に延びるほぼ楕円形を呈した形態で、長軸長5.8m、短軸長3.2mを測る。遺存状態はよくなかった。

構造 床面は全体的に平坦であるが、ほとんど硬化せず壁付近においては軟弱・不明瞭であった。壁溝は検出されなかった。炉跡は南側中央に位置する。長軸長60cm・短軸長35cmを測る。焼土の堆積及び硬化の状況は貧弱である。なお、本遺構は確認調査時の観察ではソフトローム漸移層上面で硬化面の残骸が確認され、本調査において同レベルで炉跡と考えられる焼土面が検出されており、褐色土面から4cm前後浮いた焼土面のラインが住居の床面であった可能性がある。ピットは計14個検出され、床面に不規則に存在する。床面からの掘り込みの深さはそれぞれ8～30cmを測り、平均は19cmである。ピットの形態は一定せず垂直な掘り込みのピットもあるが、掘り込みが浅く不整形なものや、柱根方向がやや内側へ傾斜していると考えられる底径の小さい逆円錐形のピット等も存在している。ピット間の距離は約10～80cmとばらついており、その配置は全体に東側に偏在する傾向を持つ。これらのピット

トの中には、本遺構に伴わないピットも存在すると考えられる。なお、住居内南側中央に土坑が存在する。北東側にある当住居跡の炉を一部切断して掘り込まれており、本遺構より新しいと考えられる。掘り込みの深さは50.4cmを測り、覆土は自然堆積の状況を呈する。遺物等は検出されなかったが、覆土等の状況から縄文時代までさかのぼる可能性がある。なお、本住居跡の推定される床面積は17.67㎡である。

遺物出土状況 遺物は、炉跡内及び住居中央付近に若干量認められるだけであった。

出土遺物 1は半截竹管による押引文である。胎土に2～5mm大の石英粒を混入する。破片の上部に穿孔を伴っている。2の地文は撚糸である。半截竹管による沈線文を施している。3はLRの単節縄文を施している。4の地文は撚糸であろう。2と同じく半截竹管による沈線文を施している。いずれも諸磯b式並行の時期と考えられる。



第11図 002号遺構及び出土遺物

炉 穴

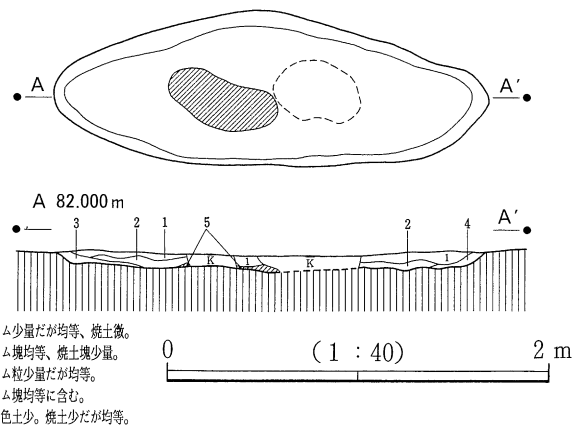
003号遺構 (第12図)

位置 H4-bグリッドより検出された。



形態 長軸長2.31m、短軸長0.83mを測り、やや細長い楕円形を呈する。長軸方向は北西-南東方向を向いている。

構造 確認面からの掘り込みは6~10cmと浅く、また確認面はトレンチャーによる攪乱を受けており、遺存状態は良くない。遺構中央北西寄り底面において、焼土が堆積していた。炉と考えられ、長径60cm・短径25cmを測る。



第12図 003号遺構

遺物出土状況 遺構内において遺物の出土

は見られなかったが、本グリッド周囲から縄文時代早期条痕文系土器片が検出されており、当遺構の帰属時期も縄文時代早期と考えられる。

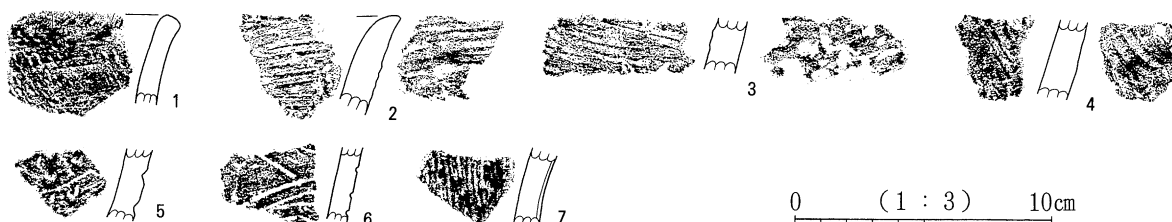
なお、本遺跡は各グリッドとも著しい攪乱を受けており、消失した炉穴の存在も考えられるが、各グリッドとも一括遺物を含めた当該期の遺物は乏しく、現状では周囲に炉穴が存在していた可能性は低いと考えられる。

遺構外出土遺物

縄文時代土器 (第13図)

II層中から出土した縄文土器片は少なく、時期は早期、前期に限られている。竪穴住居跡の周辺からの出土が主であり、本来竪穴に伴っていた可能性が高いものである。

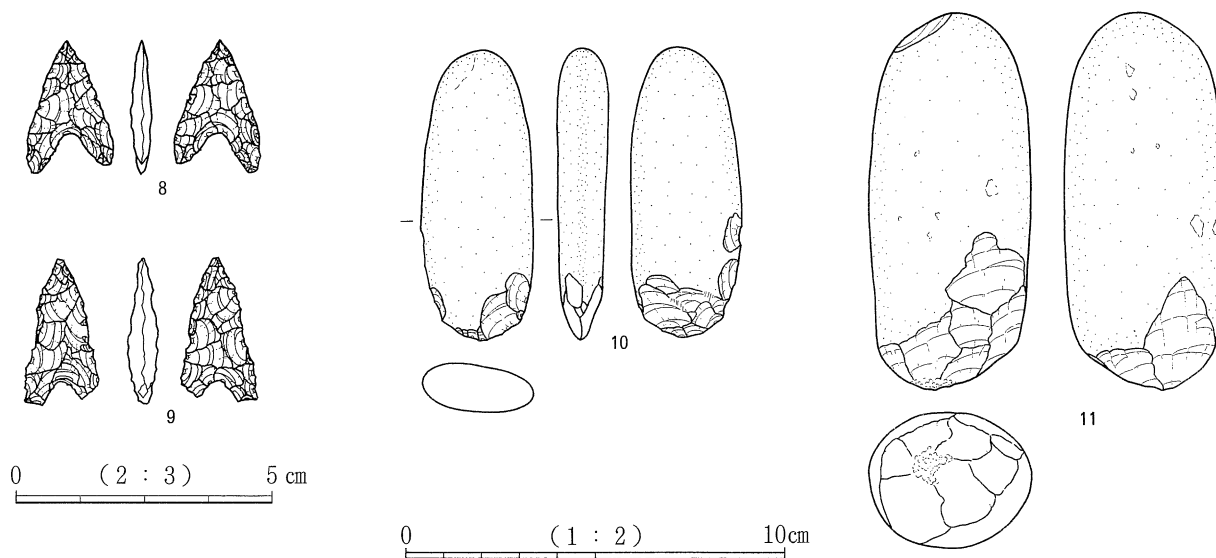
1は夏島式である。Rの撚糸がやや粗く施文されている。2~4は表裏に貝殻条痕を伴うものである。繊維を多く含む。文様を伴わないが鶴ヶ島台式の粗製土器であろう。5~7は前期の諸磯b式土器と思われる。内面の調整が丁寧におこなわれている。5は平行する沈線上に刺突文を施している。6は弧線文である。7はいわゆる条線である。



第13図 遺構外出土縄文時代土器

縄文時代石器（第14図）

出土した石器の器種は石鏃2点、礫斧1点、敲石1点である。時期は早期か前期のどちらかと思われるが、礫斧は早期鶴ヶ島台式に属するものと考えられる。8・9は石鏃である。重量は、8が0.947g、9が1.433g、石材は安山岩によく似た材質を呈する。同時期のものであろう。10は楕円形の円礫の一端を剥離調整し刃部を作るもので、礫斧などとも呼ばれる石斧である。重量は42.81gである。若干刃部が研磨されている。11は敲石である。先端に敲打痕を伴い、周囲に敲打による剥離が見られる。重量は228.9gである。



第14図 遺構外出土縄文時代石器

3. 平安時代、その他

方形周溝状遺構

004号遺構（第15図）

位置 G3-cグリッドにおいて検出された。

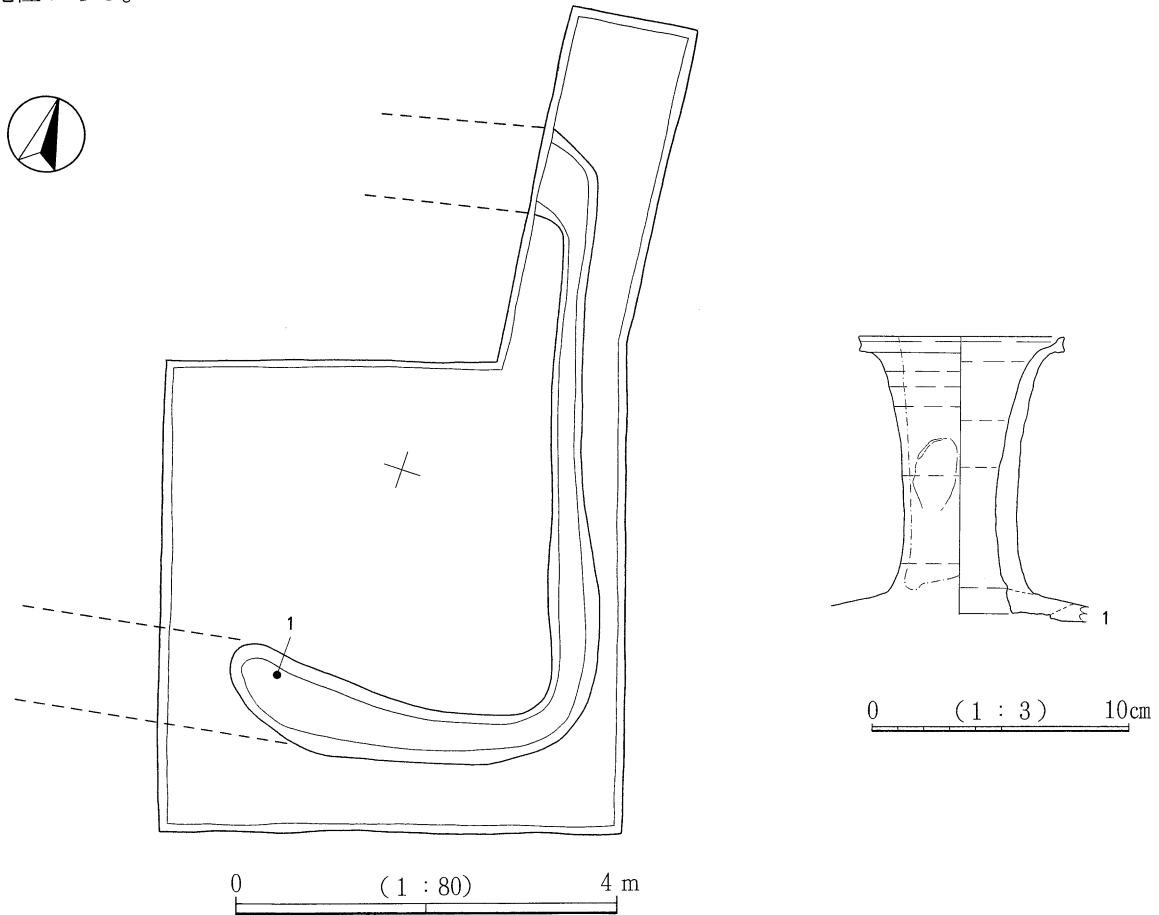
形態 確認面は耕作による攪乱が著しく、遺構確認さえ困難な状況であり、西側は遺構が消失してしまっていた。周溝平面は外周・方台部ともに隅に丸みを帯び、やや鈍角気味に開く方形の形態を現状では有している。

構造 確認面における規模は、外周で推定6.8m、方台部で推定5.1mと考えられる。主軸は、座標上の東-西から北東-南西方向に約19°振れる方位である。周溝は、確認面において幅30~80cm前後であり、深さは5cm程度である。周溝底面はおおむね平坦であるが、遺構の底面がかろうじて残っているという状況であった。また、埋葬施設は検出されなかった。

遺物出土状況 遺構自体が著しい攪乱を受けているものの、遺構に伴うと思われる須恵器が1点出土している。

出土遺物 1は須恵器の長頸壺である。口縁部から胴部上端まで残り、内外面ロクロ調整を行っている。口縁部から頸部にかけての一部に暗緑灰色の自然釉がかかる。また、頸部中央に左手親指と思わ

れる指頭痕が明瞭に残る。胎土は、灰白色土に黒色粒（0.5mm大・少量だが均等）・白色粒（0.8～1.0mm大・微量）・石英粒（0.2mm大・きわめて微量）を含む。器面の色調は、外面は釉部分が暗緑灰色、釉境界部分が暗黒色、素地面が暗赤褐色を呈し、内面はにぶい暗赤褐色を呈する。焼成は良好である。頸部と胴部の接合方法は三段構成と考えられ、頸部下端は接着にともなうナデによって粘土が下にはみ出している。本遺構の時期決定は難しいが、遺物の特徴等から判断すると8世紀後半に比定される可能性がある。



第15図 004号遺構及び出土遺物

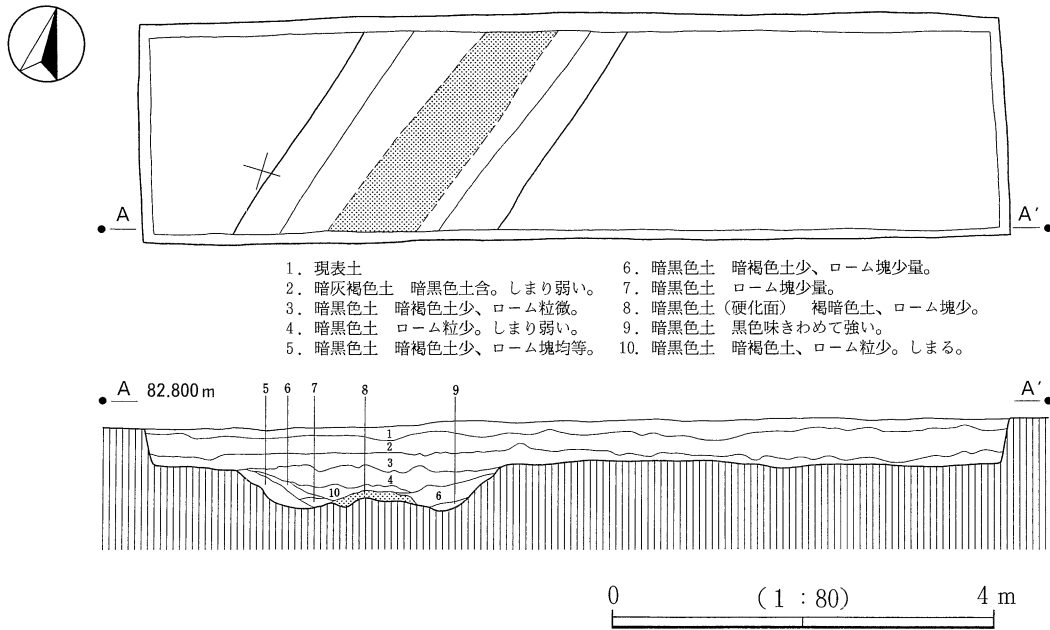
道路状遺構

005号遺構（第16図）

位置 A1-aグリッドから検出された。

形態・構造 溝状に掘り込まれており、検出時の溝幅は2.3m、深さは30～40cmを測る。主軸方位は、座標上の東-西から北東-南西方向に約70°振れる方向である。溝の下底面中央が道状に硬化していた。硬質面は、幅50～80cm、厚さ約10cmを測る。

遺物出土状況 遺物は、調査範囲が狭小だったこともあり検出されなかったが、隣接する北西部において8世紀中葉と考えられる道路状遺構が検出されており、本遺構の帰属時期も、奈良・平安時代までさかのぼる可能性がある。



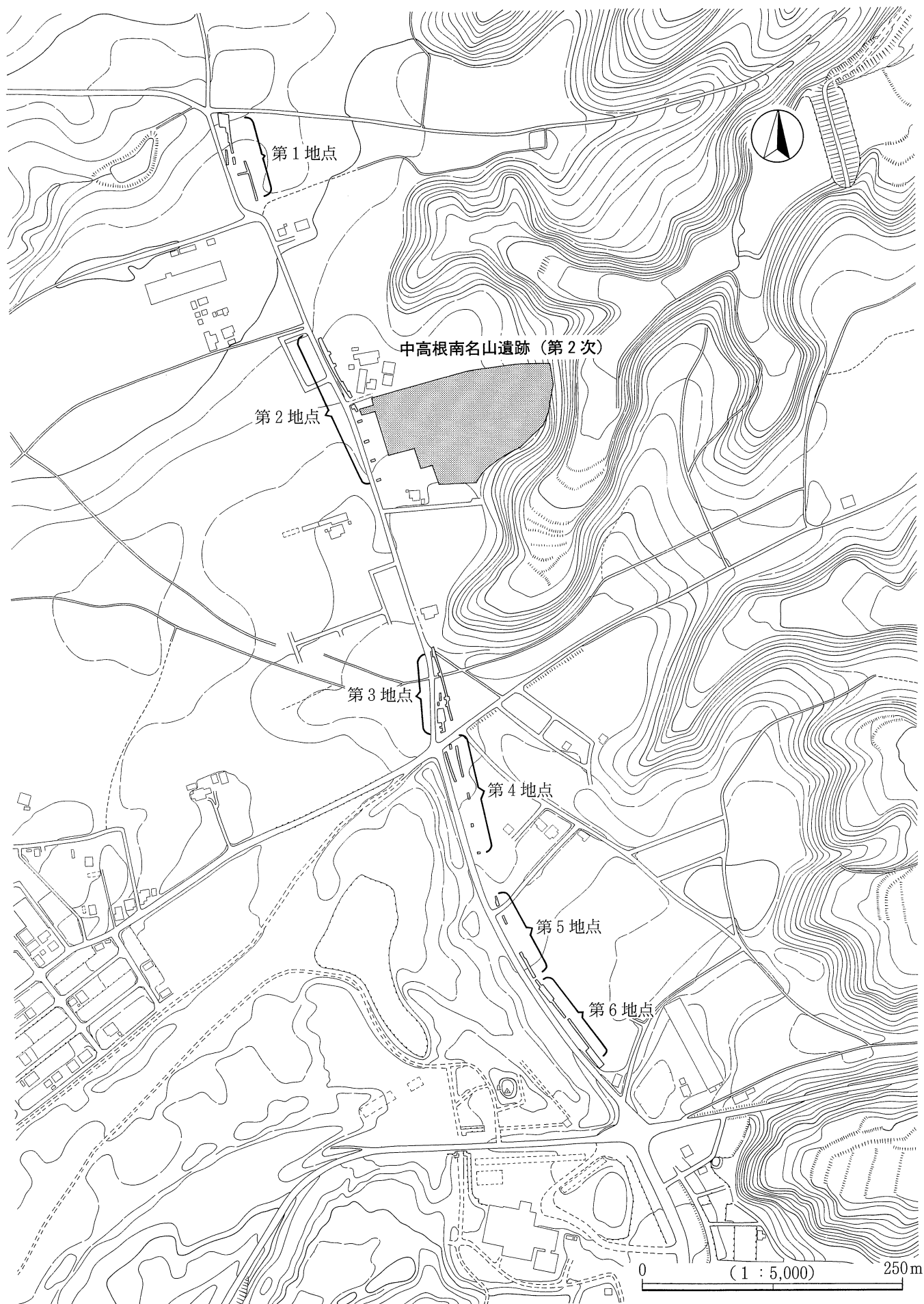
第16図 005号遺構

第3章 まとめ

中高根南名山遺跡は、今回報告する第2次調査部分と、隣接する西側において道路改良工事に伴う断続的なものとして、昭和62年度から平成4年度にかけて調査が行われた第1次調査部分（第1～6地点）の2カ所が存在する^(註1)。確認調査を含めた今回の調査範囲は、その対象面積が13,000㎡に及ぶもので、本台地における調査が線による調査から部分的ではあるが、面的な調査に広がったことを意味する。今回の調査成果としては、南原遺跡との関連と合わせ、旧石器時代の遺物が面的な広がりを持って検出されたことや、縄文時代早・前期の竪穴住居跡等が検出されたことがあげられる。

旧石器時代 調査区西端のB2-bグリッド周辺及び、確認調査において調査区南東端のG4-d、H4-c、I4-aの3グリッドから旧石器時代の遺物が検出された。B2-bグリッド周辺では、製品そのものは含まれなかったが、遺物の拡散状況は、長楕円形の平面分布の北東側及び南西側に集中する傾向があり、北東側1ブロック、南西側1ブロックの計2ブロックに分けて考えることも可能であろう。ちなみに、出土した地点・層位は大きく異なるが、中高根南名山遺跡（第1次）第6地点上層遺構中においてナイフ形石器が検出され、西隣の中高根南名山遺跡（第1次）第2地点において、第2黒色帯下層から2点の自然礫と1点の剥片の出土が確認されている^(註1)。なお、単独出土石器として扱った3グリッドの遺物出土層位は、いずれもⅢ層（黄褐色軟質ローム）下部～Ⅳ層（明褐色硬質ローム）内である。この3グリッドは、本遺跡が立地する台地の南東側縁辺に位置しておりすぐ下に養老川水系により樹枝状に開析された谷津が入り込んでいる。したがって、これらのグリッド一帯がⅢ層下部～Ⅳ層相当時期に一つの文化層として展開していた可能性が高い^(註2)。そして、この3グリッドの遺物出土層位と北西側端部のB2-bグリッド周辺における黒曜石集中地点の出土層位は、相関する部分もみられる可能性があるため、南東側縁辺一帯のブロックと北西側端部にある黒曜石集中地点ブロックとの間に相互に関連するユニットの存在等を考えることもでき、今後の周辺調査における課題となろう。

縄文時代 調査区北西端において、早期（鶉ヶ島台式）の竪穴住居跡1軒と調査区南側から前期（諸磯b式）の竪穴住居跡1軒及び調査区南東端のH4-bグリッドから早期と考えられる炉穴1基が検出



第17図 中高根南山遺跡第1次調査地点（第1～6地点）及び第2次調査地点

された。遺構の密度は粗いが、今まで市原市内ではあまり多く検出されていない縄文時代早期及び前期の竪穴住居跡を検出できたことは、北西約300mに位置する南原遺跡の存在と合わせ非常に興味深い。001号遺構、002号遺構の2軒の住居跡は、多数のピットが不規則に存在しその形態や深さも一定していない。また、ピット間の距離は一定せず、脆弱な印象を受けるピットも存在した。また、住居の床面が総じて軟弱・不明瞭であり、特に002号遺構の焼土面が黄褐色軟質ローム漸移層上層面において平面的にひろがっていたこと等を考えると、当該期の竪穴住居跡の床面がその後の時期の竪穴住居跡において一般的となる、褐色ローム面まで掘り下げて床面を構築している状況とは異なっていることが考えられる。このことは、壁溝が検出されない点と合わせ、当該期の竪穴住居跡の構造を考えると一つの重要な視座を与えてくれている。確認調査を含めた対象面積は、台地の南東縁辺を含む13,000㎡と比較的広範囲にわたり、かつ面的なものであった^(註2)。この中で検出された竪穴住居跡は早期(鵜ヶ島台式)1軒と、前期(諸磯b式)1軒のみであった。西側に隣接する中高根南名山遺跡(第1次)第1～6地点での調査においても、当該期の竪穴住居跡の検出はされていない。本調査区は耕作による攪乱が著しかったが、確認調査時の各グリッドにおける縄文時代遺物の検出は、一括遺物を含めてもきわめて少量だった。このことは、先述した当時の建物構造の相違等の諸条件を考慮しても、攪乱による遺構の消失ではなく、遺構の存在そのものが少なかったことを意味していると考えられる。また、早期の竪穴住居跡には炉が確認されず、前期の竪穴住居跡で検出された炉と考えられる焼土面は、焼土の堆積や硬化のしかたが貧弱であり、長期に使用された炉とは考えにくいものであった。一方では、市原市北部の国分寺台に存在する諏訪台遺跡のように縄文時代早期及び前期において、長期に営まれたと推測される集落を形成しているパターンも報告されている^(註3～4)。つまり、当該期は集団として集落を構成し定住する形態も存在するが、家族等の最も小規模な成員を単位とし仮小屋的な住居施設をつくり長期に定住せず、短期の滞在をくりかえしながら移動をしていくといった状況をも想定することができると考えられる。遺構数が少ないことが、当時のひとつの活動パターンを提示していると考えられる。

奈良・平安時代 調査区中央南東寄りのG3-cグリッドから、方形周溝状遺構を検出した。現状では単独で存在しているが、本グリッドを含む周囲のグリッドの確認面は耕作により著しく破壊され、本遺構も底面付近がかるうじて残存している状況であり、同種の遺構が存在していた可能性がある。ちなみに、西隣の中高根南名山遺跡(第1次)においても本遺構とほぼ同時期と考えられる方形周溝状遺構の検出が報告されている^(註1)。また、調査区西端のA1-aグリッドから道路状遺構が検出された。遺物の出土がなく時期を特定することはできないが、溝状に掘り込まれており下底面中央が道状に硬化していた。硬化面の両脇にはきわめて黒色味の強い覆土が堆積していた。なお、北西部に隣接する中高根南名山遺跡(第1次)第2地点から道路状遺構が検出されているが^(註1)、主軸方位・規模・形状ともに異なり同一の遺構ではないと考えられる。

今後、少しずつでも周囲の調査が進めば多くの遺跡の存在が認識されている、養老川流域における段丘面一帯の歴史が、より明らかになるものと期待される。

(註1) 半田 堅三 『中高根南名山遺跡』 (財)市原市文化財センター 1995

(註2) 小川 浩一 「第5章 中高根南名山遺跡」 『平成9年度 市原市内遺跡発掘調査報告』
市原市教育委員会 1998

(註3) 浅利 幸一 「5. 諏訪台古墳群」 『昭和61年度 市原市文化財センター年報』
(財)市原市文化財センター 1986

(註4) 浅利 幸一 「14. 諏訪台遺跡」 『昭和63年度 市原市文化財センター年報』
(財)市原市文化財センター 1988

写真図版



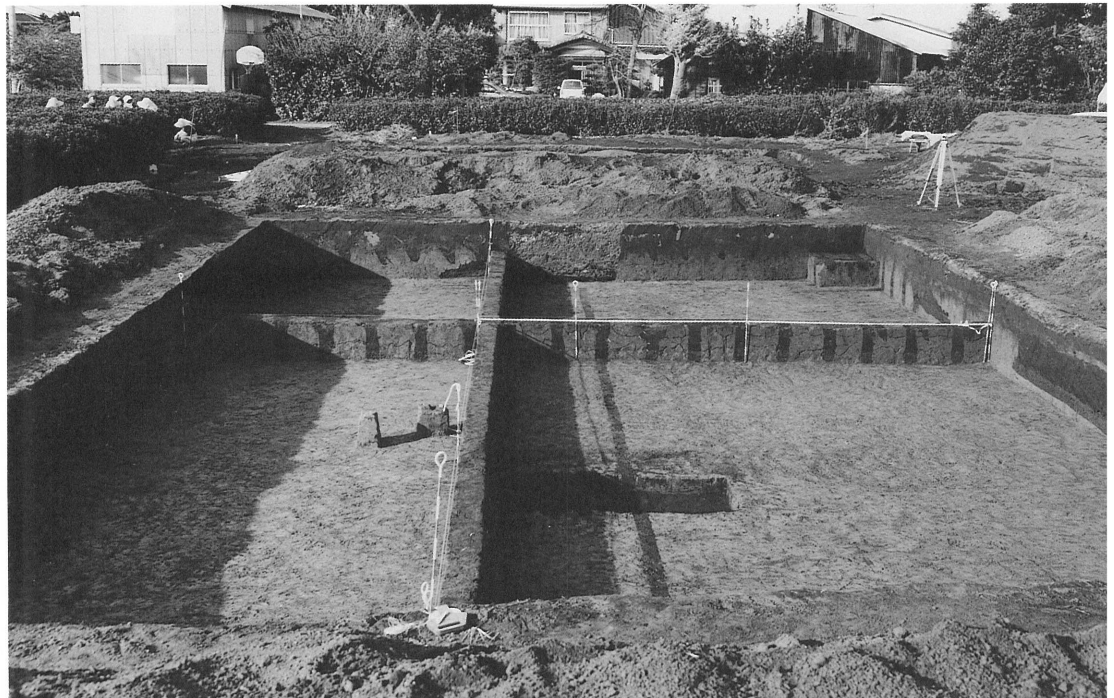
航空写真 (約 1 : 10,000) <昭和36年撮影>



確認調査状況
〔南西から〕



確認調査状況
〔南東から〕



第1ブロック調査状況
〔南から〕



001号遺構
〔西から〕



002号遺構
〔北西から〕

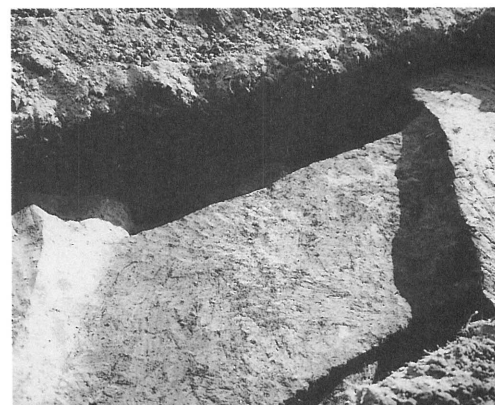


001遺構
遺物出土状況
〔西から〕

003遺構
〔南から〕

004号遺構
遺物出土状況
〔東から〕

005号遺構
〔北から〕

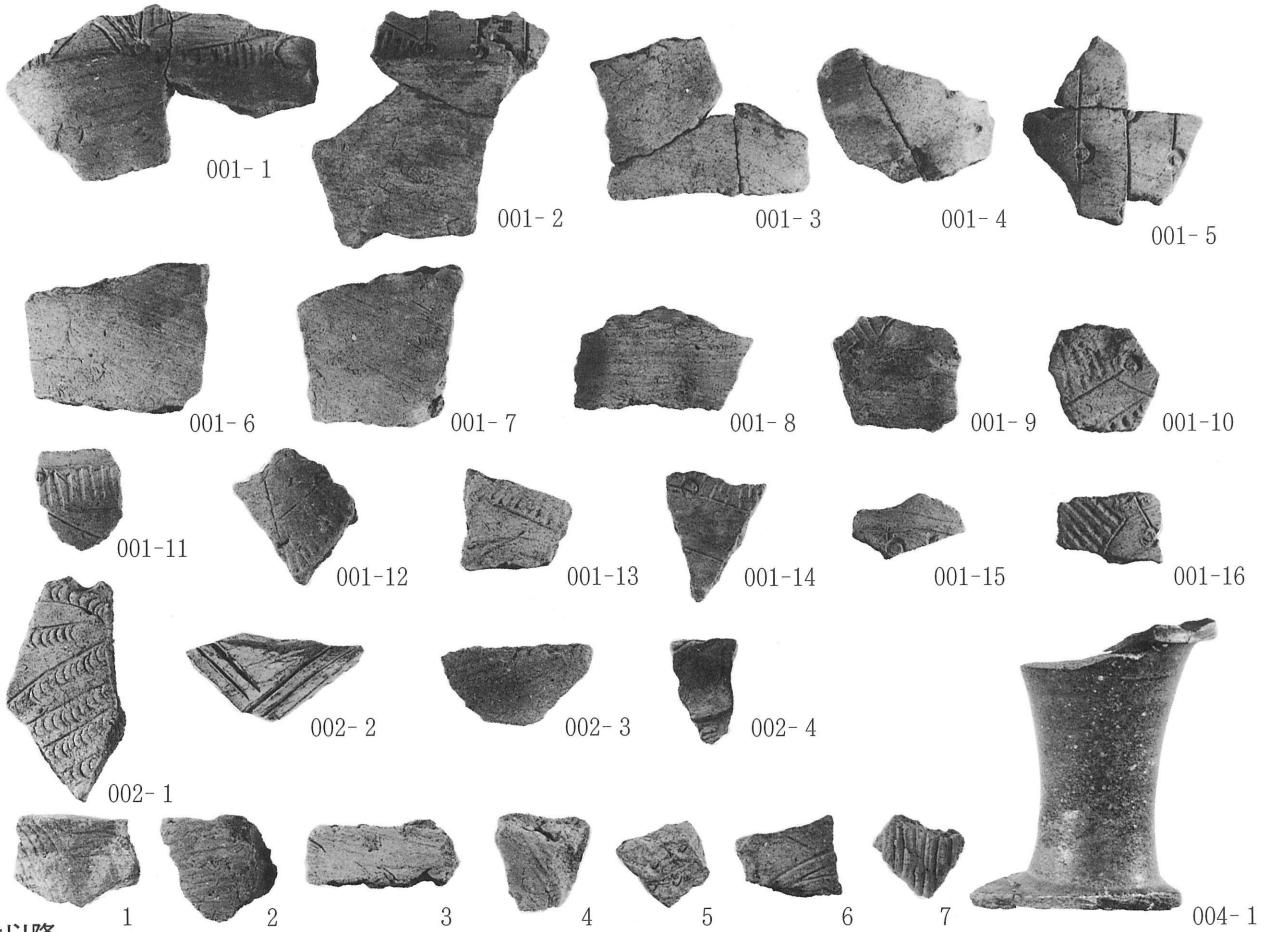


第1ブロック

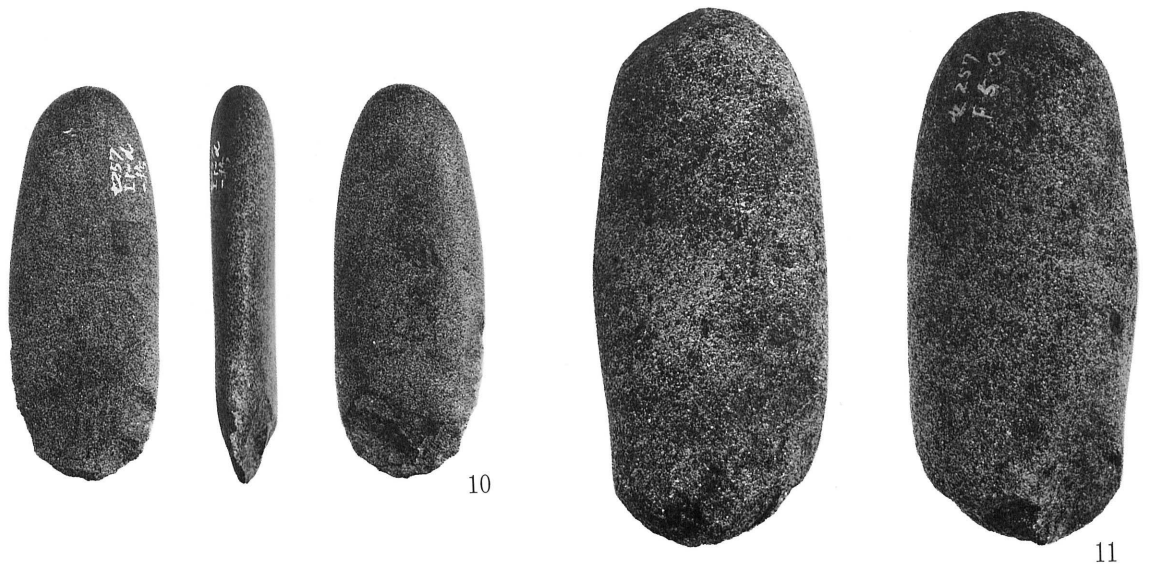


単独出土石器





縄文時代以降
出土遺物



縄文時代石器

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかたかねなやまいせき (だいにじ)							
書名	中高根南名山遺跡 (第2次)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	財団法人市原市文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第62集							
編著者名	蜂屋孝之・小川浩一							
編集機関	財団法人市原市文化財センター							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地 TEL 0436 (41) 7300							
発行年月日	1998年10月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中高根南名山遺跡	千葉県市原市中高根 字南名山1,341-1	12219	セ257	35度 25分 42秒	140度 05分 49秒	19971110 } 19971126	112㎡ (上層) 100㎡ (下層)	老人保健施設建設に伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
中高根南名山遺跡	散布地	旧石器		石器剥片集中地点 1ヵ所	チップ・フレーク、 礫、焼礫、UF、石核	縄文時代早期 (鶴ヶ島台式期) に比定される竪穴住居跡を検出した。		
		縄文		遺物検出グリッド 3ヵ所	チップ、ナイフ 形石器、石刃			
				竪穴住居跡2軒	縄文土器			
		奈良・平安		炉穴1基	長頸壺			
				方形周溝状遺構 1基				

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第62集

市原市中高根南名山遺跡（第2次）

平成10年10月20日 印刷

平成10年10月30日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

発行 医療法人社団 高原会

財団法人 市原市文化財センター

〒290 千葉県市原市能満1489番地
-0011 Tel 0436 (41) 7300

印刷 三陽工業株式会社

〒290 千葉県市原市五井5510-1番地
-0056 Tel 0436 (22) 4348